Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2026-10-26

高校生と学区空間・学校空間:質問紙調査を通じた把握

末富, 芳

(Citation)
研究論叢,11:27-33

(Issue Date)
2004-12

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81008635

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81008635

KOBE UNIVERSITY

研究ノート

高校生と学区空間・学校空間

—質問紙調査を通じた把握—

末冨　芳

0　はじめに

本稿では、平成 15 年度に実施した近畿地方所在の 3 高校への質問紙調査をもとに、高校生が自らを取り巻く制度的空間（学区）、教育的空間（学校）をどのように認識しているのかを主要な質問事項に関する基礎的な集計を通じ把握していく。

1　調査の概要

調査の概要について述べる。本調査は、平成15年6月～平成16年1月にかけて実施された。

実施対象は近畿地方X県に所在する公立高校3校の2年生、全日制普通科理系文系2クラスずつを対象として行われた。実施方法は、各クラスにおいて担任から生徒に配布してもらい、その場で記入、回答してもらう方式を採用した。なお一部の協力校では郵送による返送方式を採用している。

質問紙総配布数は 475 通、回収数は 426 通、回収率は 89.7%であった。

質問紙は、以下の事項によって構成されている。学校生活（通学手段、通学時間、学校生活への満足度、学校空間の中でよくいる場所、好きな場所、嫌いな場所）、日常生活（家族関係、放課後の過ごし方、友人関係）、進路、学区制度の在り方。

以下、主要な質問項目について、基礎的な集計結果を示し分析を行う。

2　高校生と学校空間・学校生活・学区空間

高校生が学校生活についてどのような認識を持ち、学校空間の中でどのような場所に愛着や好悪の念を抱いているのだろうか。

(1)　学校生活に関する認識：高い学校満足度

まず学校生活に関する認識をたずねた質問項目のうち、肯定的認識が高いものに注目する。質問は、各項目に対し 4 件法（そう思う、ややそう思う、あまりそう思わない、そう思わない）で回答をもとめたものである。未回答率が質問項目毎にばらつきがあるので記入率が 80%を越えたもののみ分析の対象とした。(図表 1)

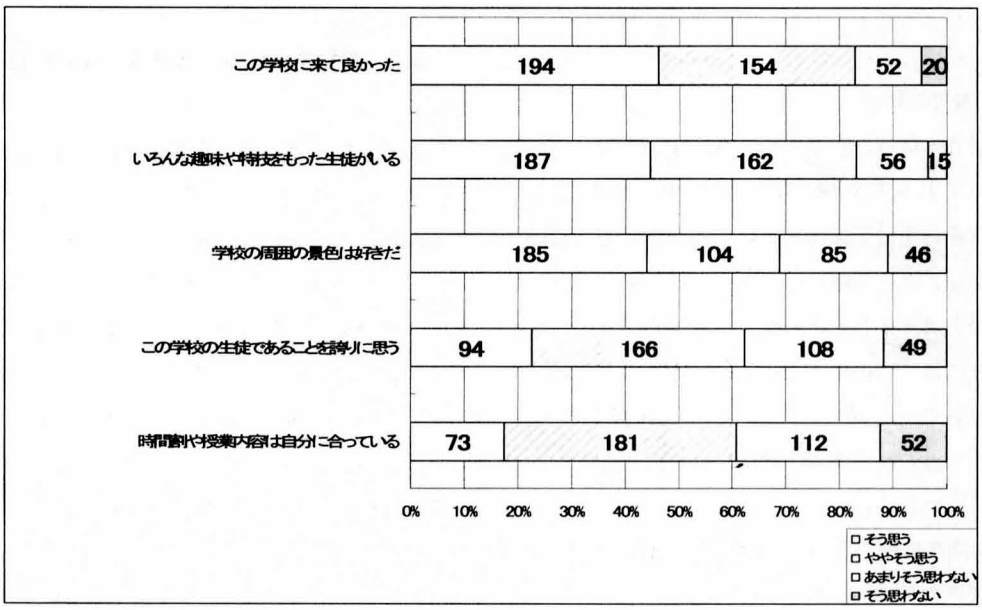
肯定的認識（そう思う＋ややそう思う）と回答した割合がもっとも高かったのは、「この学校に来てよかったと思う」である。そう思う（194名、46.2%）ややそう思う(154名、36.7%)、合計 338 名、82. 9%であった。在学中の高等学校に対し「来てよかった」と思うすなわち一定の満足度を示す生徒は回答者の 8 割以上にのぼり、生徒の全般的な学校満足度は高いといえる。ほかにも「この学校の生徒であることを誇りに思う」「時間割や授業内容は自分に合っている」で 6 割以上の生徒が肯定的回答を示しており、

学校に対してある程度の満足を有する高校生、という高校生像が形成されよう。

また学校空間の観点から注目されるのは、「学校の周囲の景色は好きだ」という質問項目について、そう思う（185名、44.0%）、ややそう思う(104名、24.8%)、合計で329名、68．8%の生徒が肯定的回答を行っているという点である。「学校の建物」すなわち校舎に対する愛着について肯定的回答を示したのは230名、55.2%にすぎなかった。学校空間への愛着や好悪を訪うた質問項目についての肯定的回答の割合は、「周囲の景色」＞「建物」という結果となった。

「学校の周囲の景色」は生徒にとって登下校中の際に家庭から学校へと気持ちを切り替える際の重要はファクターのひとつである。また、授業中の安息の対象であるとともに、卒業後のノスタルジーを形成する重要な要因ともなる。学校の所在地や周辺環境ついての生徒の意識や愛着はこれまでの研究でさほど省みられてこなかったが、生徒が在学中から周辺景観に対しリフレクシビティーを伴った愛着を感じている可能性は示唆される。

図表1　学校生活に関する肯定的認識が高い質問項目（上位5項目）（N=407～422）



(2)　学校生活に関する否定的認識：学校周辺環境や教師への信頼、授業の興味

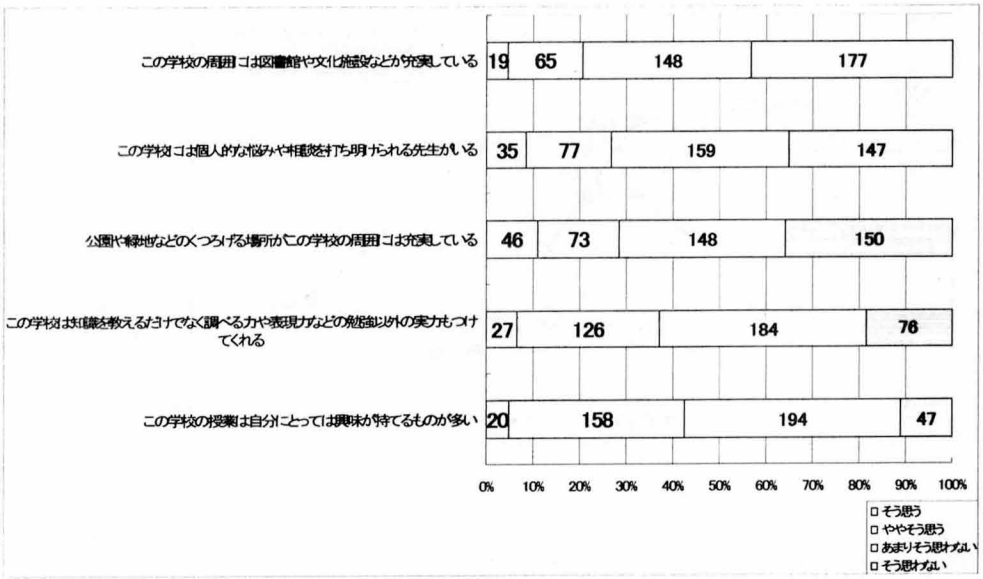
次に学校生活に関する否定的認識（あまりそう思わない＋そう思わない）が5割を越える質問項目をピックアップした。（上位5項目）

学校周辺環境（図書館や文化施設、公園や緑地）の充実度について肯定的回答は3割を切り、否定的回答が7割を越えることが判明する。生徒の学校空間認識における周辺環境の重要性を裏打ちするものと考えられる。

また、「個人的な悩みや相談を打ち明けられる先生」「勉強以外の実力もつけてくれる」「授業は自分にとって興味が持てるものが多い」等においても否定的認識が強いことが判明する。

学校への満足度とは別に、教科指導中心の高校生活にあって、高校生の過半数は教師への信頼、授業への興味を持たないという結果もあきらかになった。

図表 2　学校生活に関する否定的認識が高い質問項目（上位 5 項目）（N=407～422）



(3)勉学へのアンビバレントな態度、退学を考えたことがある 26%の生徒

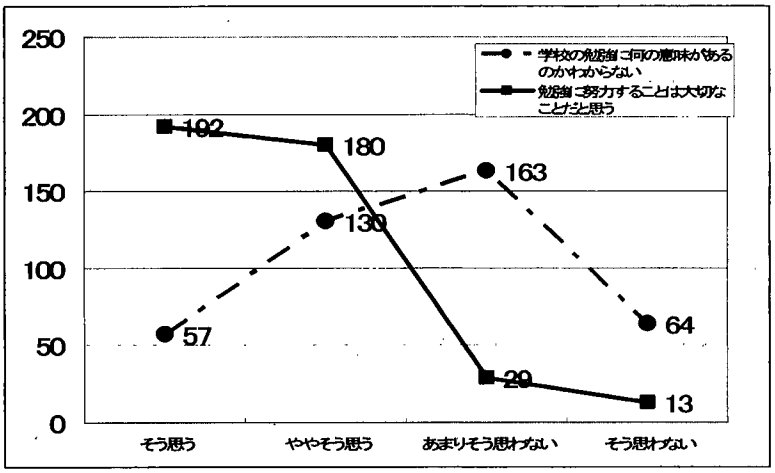
次に、高校生の生活の主要部分を占める「勉強」について注目する。「勉強」について有効回答をした 414 名の生徒は、「学校の勉強に何の意味があるのかわからない」について、そう思う（57 名、13.8%）、ややそう思う（130 名、31.4%）と回答している。一方で、「勉強に努力することは大切なことだと思う」について、そう思う（192 名、46.4%）、ややそう思う（180 名、43.5%）と約 9 割もの生徒が、肯定的回答を行っている。（図表 3）

勉強する意味はわからないが、勉強に努力すること自体は大事、という勤勉メカニズムは少子化・大学全入時代の高校生においても維持されており、筆者にはやや意外な結果となった。

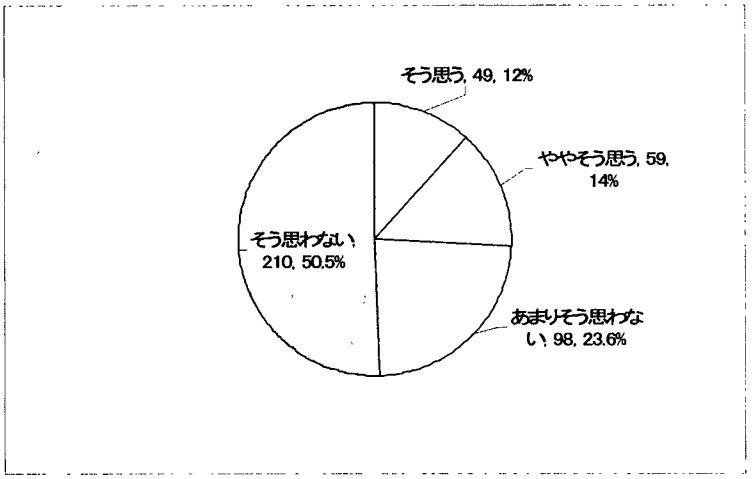
また、「学校をやめようと思ったことがある」かどうかについて質問を行ったところ、全体の 26%、108 名が「そう思う」「ややそう思う」と回答した。（図表 4）

なお「学校をやめようと思ったことがある」については学校間に統計的な有意差はなく、今回の調査対象となったどの学校でも 3 割弱の生徒が退学を考えたことがあるという結果が判明した。

図表 3　勉強に対するアンビバレントな態度（N=414）



図表 4　「この学校をやめようと思ったことがある」（N=416）（度数,%）



(4)学校空間と生徒：よくいる場所、好きな場所、嫌いな場所

学校内で、よくいる場所、好きな場所、嫌いな場所については、教室、部室、部活の活動場所、特別教室、ろう下等の 15 の選択肢から 3 つを選んで○をつけるマルチプルアンサー方式で質問を行った。

それぞれの度数について総計し、上位 5 位を示した。(図表 5)

よくいる場所、好きな場所の上位は教室、部室が占めている。その他に、よくいる場所として、ろう下、カフェテリア等のマージナルな空間、好きな場所の第 3 位に図書室があがった点に特色が認められる。なお好きな場所が「ない」という回答も 51 ポイント存在する。

なお、嫌いな場所については、「ない」と回答した生徒が 214 ポイントと最多で、以下、職員室・教官室、グラウンド、食堂やカフェテリアと続く。食堂やカフェテリアについては、好きな場所、よくいる場所と回答した生徒も多いことから、友人グループ毎に「棲み分け」が行われており、そのことが食堂やカフェテリアへの愛着や反感を両義的に引き起こしているという仮説が導かれる。

なお、その他項目の自由記述として、よくいる場所については「トイレ」「マンションの駐車場」「生徒会室」「パソコン室」、好きな場所「木や緑の自然の多い場所」「パソコン室」「生徒会室」、嫌いな場所「トイレ」があげられていた。

図表 5　よくいる場所、好きな場所、嫌いな場所（マルチプルアンサー方式、3 つまで）

	よくいる場所	回答総数
1	教室	374
2	部室、部活の活動場所	237
3	ろう下	62
4	食堂やカフェテリア	42
5	体育館	40

	好きな場所	回答総数
1	部室、部活の活動場所	195
2	教室	192
3	図書室	76
4	食堂やカフェテリア	51
5	ない	51

	嫌いな場所	回答総数
1	ない	214
2	職員室・教官室	78
3	グラウンド	37
4	食堂やカフェテリア	24
5	保健室	23

3　高校生と学区空間

では次に、高校生が高校受験の際に意識せざるをえない制度空間である学区への認識を整理しておく。

（1）三極分化する学区空間への意識

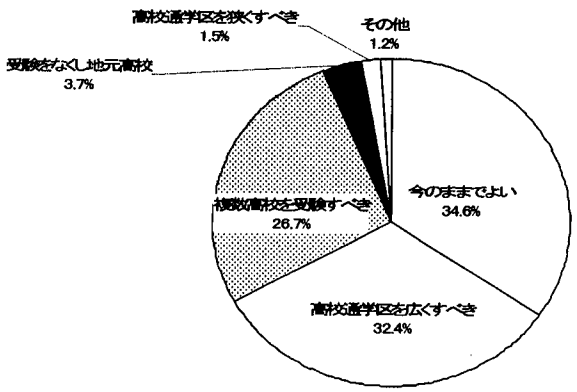
「高校受験のあり方について、あなたの考えに近いものに○をつけてください」(単一回答方式、N=408）への回答傾向から、学区認識を把握した。(図表6)

生徒の回答傾向は、大きく3つに集約される。「今のままでよい」(141名、34.6%)、「高校通学区を広くすべき」(132名、32.4%)、「複数高校を受験すべき」(109名、26.7%)であった。

少数の回答にとどまったのは「受験をなくし地元高校」(15名、3.7%)、「高校通学区を狭くすべき」(6名、1.5%)、「その他」(5名、1.2%)である。

このことから、高校生の学区制度の在り方についての考え方が三極分化しており、いずれかに容易に集約できるものではないことが判明する。学区拡大を原則とする現在の高校入試の在り方に一石を投じるデータといえよう。

図表6　生徒の学区認識（N=408）



（2）第1志望校かどうかと学区認識

学区認識について、第1志望の高校へ入学できた者ほど、学区制度が「今のままでよい」と考える割合が高く、そうでない者は現状からの改変を求める割合が高い、というよう仮説が成立するかどうかの検討を行った。(図表7)

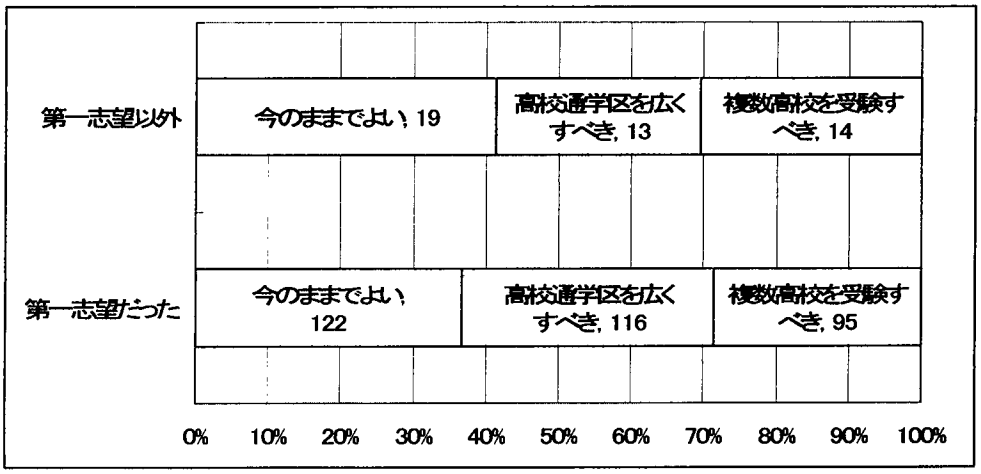
第一 志望以外の学校であったと回答した者は46名、第一志望であったと回答した者は333名であった。学区意識への回答割合を見ると、第一志望でなかった者の41.3%(19名)は「今のままでよい」と回答しており、第一志望校に入

学した者の 63．3%が「高校通学区を広くすべき」「複数高校受験」と回答している。

カイ 2 乗検定（5%）水準の結果も、第 1 志望であるかどうかと、学区認識との有意な関連性は棄却された。

これらのことから、学校種別や第 1 志望であるかどうかと、学区認識との統計的な関連性は希薄であるといえる。いいかえれば、学区認識と「行きたい学校」（上位校、第 1 志望校）であるかどうかとはそれほど関係がないといえる。

図表 7　第 1 志望かどうかと学区認識（N=379）



4　小括

以上、高校生への質問紙を通じて、高校生と学区空間・学校空間との関連を明らかにしてきた。

まず学校空間については、「学校の周囲の景色」について生徒の肯定的感情が比較的高いこと、「学校の周囲の図書館や文化施設」についての充実度について否定的回答が多いことが注目される。これらのデータは、学校周辺環境への生徒側の認識の高さを示していると考えられるからである。

通常、学校空間という場合に、校舎と校地で形成される学校内部空間を想定する。しかし今回の質問紙の結果からは、生徒の意識する学校空間には学校周辺環境も重要な要素して含めうるのではないかという可能性が示唆される。

次に学区空間の場合には、生徒の意識が「今のままでよい」、「高校通学区を広くすべき」、「複数高校を受験すべき」に分裂していることが最も特徴的である。学区制度への認識は第 1 志望かどうかに関連していないことが判明している。なお学校間の有意差もなかった。

このことは生徒の学区意識が、個人の受験経験に左右されず、社会的意識（たとえば家族や塾の影響、周囲の人間関係）の影響を受けている可能性を示唆するものである。

本稿の目的は質問紙調査の概略を紹介することに置かれているので、稿をあらためて検討する課題としたい。

（福岡教育大学）